

緒方貞子さんを支えていこう

「日本も緒方氏も、別々に、世界における新たな自分の役割を明確にしようとしてきた。これまでのところ、緒方氏の方が先をいっている」

国連難民高等弁務官（UNHCR）の緒方貞子さんを昨年、米紙が評した言葉だ。その緒方さんが国連総会で再任された。実績が高く評価されたので、来年一月から五年間、引き続き世界の難民救済の責任者として指揮をとる。うれしくごた。

任期中で退任した前任者のおとを受け、緒方さんが第八代の高等弁務官に就任したのは一九九一年一月だった。それから三年、カンボジア、旧ユーゴスラビア、ソマリアと続出する難民の救援や帰還問題に取り組んできた。

飢餓に苦しむアフリカ各地や民族紛争の燃えさかるボスニア・ヘルツェゴビナへと精神的に足を運び、訪ねた国は五十カ国近い。仕事ぶりに接してきた国連職員や各国

外交官らは、口をそろえて緒方さんの行動力と、先進国、途上国のわけへたでなく率直に注文し、批判する勇氣、考え方の柔軟さを評価する。

しかし、そうした活躍にもかかわらず、就任時に千五百万人だった世界の難民はいまや千九百万人を超えた。さらに約二千万人が自国内で避難民となっている。UNHCRの任務はふえ、その活動を支援する必要はますますかかってくるのだ。

再任にあたって、緒方さんは日本の財政援助を評価する一方で、「何か要請があったから受けるか受けないかを考えるのではなく、自分から踏み込んでいってほしい」と注文し、「民間の援助、活動がまだ弱い」と指摘した。

UNHCR駐日事務所によると、北欧の援助先進国には、「頼りになる」民間団体が数多くある。そうした国では、公務員が休暇を二年とって国外で難民援助や福祉関係の活動に従事できるといった制度的な支えもあるという。

残念ながら、日本の現状はそうしたところからは遠い。しかし、変化の芽が見られないわけではない。

この夏、同事務所は五人の学生をスーダンなど周辺国からの難民を収容するケニア北東部の難民キャンプに送り、一カ月間、

実際に援助活動を学ばせた。緒方さんの名前をとって「キャンプ・サタコ」と名付けられた企画である。

参加した学生たちは、難民の若者と日本の若者が「共有する部分の多さ」を実感した。「難民」と「日本人」という立場から互いに名前と呼び合ふ関係になるうちに「彼らとともに、彼らと自分のために働き、生きていきたい」と難民との共感を語るまでになった。

民間企業の男性社員グループがボランティア活動に参加したり、企業が首領をとって余暇にボランティア活動を始める、といった動きも出ている。「まだ極めて限られた範囲ではあるが、手ごたえのある動き」と同事務所は期待する。

民間の活動や若者の輪が広がる人的貢献を支えるそのこととなる。その中から緒方さんやカンボジア再建につくした明石康国連事務総長特別代表に続く人材が生まれる。そうしたことを「顔のない国」という評価を返上する大事な道筋であろう。

緒方さんは日本の若者に「こんなに恵まれた国は世界の例外であるという認識をまっすぐ欲し」と訴えている。地球規模の広がりをもつ問題をわれわれ自身の問題として考える。それは若者だけに与えられた課題ではない。